

〈野宮〉の身にしむ色

三宅晶子

〈野宮〉の作者について、作品の内部徴証から金春禪竹の可能性が大きいと言及したことがあった（「禪竹の業績」『金春禪竹一人と業績』国立能楽堂、昭和六十一年四月）。最近伊藤正義氏がやはり禪竹の作能法との共通性から、禪竹作であろうとされている（新潮日本古典集成『謡曲集下』各曲解題、昭和六十三年十月）が、伊藤説と拙稿とは部分的に重なりはするものの、別個の根拠に基づいている。禪竹の能と〈野宮〉の関係については再論を試みるつもりでいるが、本稿では〈野宮〉の主題にかかわると考えられる語句を取り上げて、いささか私見を述べてみたい。

序ノ舞・破ノ舞を含む〈野宮〉の舞の段は、「昔を思ふ花の袖。月にと返す気色かな（詠）と、懐旧の舞として舞われるのだが、この場合の想起されている過去は非常に限定的である。舞の段の謡は大半が野宮の描写に費やされており、唯一の例外はシテの感情が述べられる「訪はれしわれも、その人も、ただ夢の世と、……懐かしや」（ノリ地）の部分である。

つまりここで懐かしんでいるのは、華やかであった若い日全体ではなく、光源氏が野宮を訪問した九月七日その日であり、訪れたその人と迎えた自分を偲んでいるのである。ということはこの舞が源氏への恋慕の情の表現としての意味を持つということになる。

いったい〈野宮〉という曲は、その基調となっているのが、捨てられた身の詠嘆や怨恨などによる妄執ではなく、光源氏への沈静化された恋慕の情であって、それを晩秋の野宮の景と重ねて描いているのが特色である。そのように作品世界を統一するため、かなり本説の取捨選択・変形化を行っているが、その第一が九月七日の重視であり、その日の源氏と御息所の関係の美化であろう。九月七日以前の物語は「クリ・サシ」で極めて簡単に紹介されるだけで、大半は省略されている。九月七日の源氏の訪問を中心に、御息所の変わらぬ恋心を描いていく構成のなかでは、後シテ登場の段の車争いだけが異質のように感じられるが、車争いが伊勢へ下る決心をさせ

た直接的原因と見る『源氏小鏡』などの説を媒介にすれば（竹本幹夫氏「〈野宮〉の作風」橋の会第三回公演パンフレット）、別れの原因となった事件への激しい憎悪の表現は、すなわち源氏への恋情の別の表れとなる。序ノ舞との不連続性は表面的な印象に過ぎず、作者の意図は御息所の恋情の「激」と「静」の対比的描き分けにあったのではなからうか。

〈野宮〉は恋慕の能として計画的に構成されている曲と考えられるが、そこで注目したいのが、前シテ登場の段の「上ゲ哥」である。

……森の木枯らし秋更けて、身にしむ色の消えかへり、思へばいにしへを、なにと忍ぶの章衣、……

従来傍線部は意味が曖昧な部分とされてきた。『謡曲大観』・岩波古典文学大系・小学館古典文学全集などの諸注釈書は「美しかった花の色はすっかり消えてしまつて」としている（前掲の新潮日本古典集成では、その部分の現代語訳がない）。しかしこはそういう使い方をしていないのではなからうか。

この句は『申楽談儀』に言及される〈野宮〉がそれを転用したのであらうが、〈野宮〉がそれの意味で使用していると考えerる必要はないであらう。「身にしむ色」は、『古今和歌六帖』の「吹きくれば身にもしみける秋風を色なき物

と思ひけるかな」を本歌として、主に秋風の形容として使用される歌語であるが、〈野宮〉が禪竹作であるとすると、藤原定家の「白妙の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く」の歌が重要になってくる。後鳥羽院の命により『新古今和歌集』巻十五(恋歌五)の巻頭に据えられ、『定家卿百番自歌合』『定家八代抄』にも選ばれている定家の代表作であり、定家に心酔していた禪竹であれば、「身にしむ色」といえば当然念頭においた筈の歌である。そして定家の歌の「身にしむ色」とは、後朝の別れにながす紅涙の色であり、別れの淋しさからいっそう身にしみて感じられる秋風を形容する語であり、さらに秋風は「飽き」に通じるためにより切実に身にしむのである。つまり定家はかの語を、別れにつながる恋のイメージと結び付けて使用しているのである。この歌の印象は鮮明であるから、定家の歌を知っている者にとって「身にしむ色」は、恋のイメージと切り放しては考えられないであろう。〈野宮〉における「身にしむ色」も、当然そのような語として使用されていると言わねばなるまい。とすると該当部分は「今日九月七日にまた昔の跡に来ると、あるとき同様秋も更けて木枯らしが吹き、それが身にしみるが、またあの後朝の涙の色、別れの淋しさが蘇って来る。」という意味になる。

「消えかへり」は①すっかり消え果てる、②心が消え入りそうに思い詰める、③霜・泡などが消えてはまたできるの三種の用法があるが、能では「露の身ながら消えかへる」(經政)など、露との縁で用いる③の用法が一般的である。禪竹作の〈定家〉でも「露霜に消え帰る、妄執を助け給へや」と、やはり③の意味で使用している。〈野宮〉の場合、露・霜に類する語がそばにないために、③に訳されなかったのであろうが、定家の歌を下敷きにする、「身にしむ色」は袖の露の色であるから、それが消えてはまた結ぶと続けることは可能であろう。また「消えかへり、思へばいにしへを」と続くから、消えてしまっただけはおかしいのである。「思へば」の縁からも「身にしむ色」は、思いに関連する語である方がよい。右のように単なる情景描写ではなく、九月七日の別れを思い起こすシテの心の状態を表す語句であったのだ。

〈野宮〉における九月七日の重要性、シテの恋情による統一性などから見ても、一曲の内容を象徴すべき前シテ葦場の段には、当然あつてしかるべきキーワードであろう。

(目白学園女子短大専任講師)